

横浜市立富岡中学校 学校評価報告書（令和元-3年度）

重点取組分野	令和 3 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	新3観点を意識した授業展開をし、主体的・対話的で深い学びを実現する。実現する為に、全職員が『授業力向上校内研修』を積極的に取り組み、授業力を高め合う。また、新たに改訂された市学状の分析チャートを活用することで、生徒に適した指導方法を職員一人ひとりが考える。	昨年度に引き続き、新3観点を意識した主体的・対話的で深い学びを実現するため、全校をあげて授業力向上研修に取り組んだ。本研修は2年目となるが、今年度は公開授業の中で、ICTの活用が見られ、職員全体のICT活用の推進にも寄与することができた。	A
豊かな心	①「自分づくり・パスポート」を使って、活動や行事の目的を意識させたり、振り返りを行わせたりすることで、生徒のキャリア形成と自己実現を図る。②生徒会活動及び学級活動等の充実を図り、自治活動能力の向上やコミュニケーション能力の育成を目指す。	①行事の中止が多かったため実施の回数は少なかったが、「自分づくり・パスポート」で振り返りを行った。2年目となるので、昨年の振り返りも活用しながら、より系統的に取り組ませたい。②活動が制限される中、工夫を凝らして委員会活動や生徒会行事を行った。	B
健やかな体	①基本的な生活習慣の定着に向け、健康教育の充実を図る。②体力の向上に向け、保健体育の授業を通して、継続的に補強運動に取り組む態度を育てる。③感染症対策への意識が高まるよう、様々な場面で指導し、生徒の実生活につなげていく。	①様々な場面で、健康・安全に関わる知識の習得を心がけた。②授業内で決められた補強運動に継続して取り組み、体力向上を図ることができた。③感染症対策に努め、安心安全な学校生活を目指した。	A
自分づくり教育 (キャリア教育)	学校・学年行事に力を注ぎ、自己肯定感や自己有用感の向上に繋げる。自分づくり教育講演会をはじめ、職業講話、職場体験、進路学習などのキャリア教育を軸とした自分づくり教育を推進し、主体的に人生設計をする能力や態度を身につけ、生涯にわたって学び続ける意欲を身につける。	すべての行事を計画通りに実施できなかったが、『自分づくり・パスポート』を活用しながら生徒の自己有用感などの向上にアプローチできた。『自分づくり教育講演会』など2年連続で行っていない行事もあり、コロナ禍でも継続して行える取組を考える必要がある。	B
特別支援教育	①学校カウンセラー、専任、養護教諭、特別支援担当だけでなく、生活指導部とも連携し、個に対する支援について検討を積極的に行う。②個別の支援計画・個別の指導計画を活用して、組織的な個への支援を充実させる。	①検討会を定期的に開催し、個に対しての支援の在り方について検討を重ねることができた。②個別の教育支援計画を積極的に活用する方法についての議論を活発に行うことができなかったため次年度の課題としたい。	B
学校運営協議会 (地域連携)	①学校運営協議会の活動を学校便りなど様々な場面を通して保護者や地域に報告し、学校への理解・協力を得られるように努める。②地域により関心が持てるよう、地域の方との顔の見える関係を目指し、地区別集会を開催する。	①学校運営協議会では、地域の方々に学校の様々な取組や生徒の様子を伝え、より良い学校づくりのためのご意見をいただくことができた。②地域の方と直接関わることを目的とした地区別集会はコロナ禍のため開催することができなかった。	B
生徒指導	①生徒一人ひとりに寄り添い、変化をいち早く見取ること・変化に気づくことを全職員で意識する。②職員間で情報共有を密にし、問題行動の未然防止、早期発見・早期対応、再発防止に努める。③教育相談とアンケート調査を丁寧に行い、生徒の悩みや問題を把握し、組織的に対応する。	①生徒の変化をいち早く見取り・気づくことを全職員で心がけた。②打ち合わせ等で、情報共有を密にし、組織的に対応した。③教育相談やアンケート調査を定期的に実施することで、生徒の状況を把握し、問題解決を図った。	A
人権教育	①教育活動全体を通して自他の価値を尊重しようとする意欲・態度を養い、それを「伝え合い」「認め合い」「磨きあう」ことを実践させていく。②差別や偏見に対して自ら判断し、正しいことを進んでできる心を育て、「だれもが」「安心して」「豊かに」生活できる学校を目指す。	①身近な人との関わりの中で、相手を尊重し、思いやりの気持ちを皆で伝え合う雰囲気づくりを様々な場面で意識し実践できた。②人権作文など学校全体で取り組む中で差別、偏見に対し自ら考え振り返る機会となった。今後さらに取り組む意義を明確にしていきたい。	A
いじめへの対応	①いじめ一斉解決キャンペーン、アンケート調査を行い、いじめの未然防止、早期発見に努める。②Y-Pアセスメントを実施し、子どもの社会的スキルの育成状況を把握し、有用な横浜プログラムを行う。③教育相談活動を充実させるため、アンケートを変更し、今後の運営方法を検討する。	①アンケートを通じ学年での対応もスムーズに行うことができた。②YPアセスメントを年2回実施し、横浜プログラムを活用することができた。③教育相談活動の充実を目指し改定したアンケートについては一定の効果が得られたが、来年度も検討していく。	A
人材育成・組織運営 (働き方改革)	①キャリアステージに応じた、資質能力を高めるOJTを各分掌にて展開し、全職員の指導力の向上を図り、中堅職員や若手職員の学校運営への参画を促すことで組織的な活動を進める。②年間行事予定の見直しや、行事の精選を積極的に行い、ゆとりのある環境を整備することで、生徒と向き合う時間を確保することに努める。	①各分掌の代表を中堅・若手職員が務めることで、学校運営に主体的に多くの職員が関わられるようになった。今後も引き続き、人材育成に取り組む必要がある。②校外行事の実施時期を考慮した年間行事予定となるようにし、無理のないゆとりある職場・環境となるように努めた。	B
ブロック内 評価後の 気付き	本年度は予定していた相互の授業参観ができず、リモートと書面での意見交換となってしまった。小中合同の人権教育研修会を1中4小の全教員で行うなど、ブロック教職員の連携を保つことができたが、相互評価を行うまでに至らなかった。		
学校関係者 評価	コロナ禍だからこそ、学校は積極的な情報発信に努めており、保護者が足を運ばなくても学校の様子が伝わるように意識していることが伝わってくる1年間だった。計画通りに行事が進まない中であっても様々な状況に工夫して対応し、しっかりと信頼関係を生徒・教職員が築けていることが学校評価アンケートから伺える。生きてはたらく知(学力の向上と授業力の向上)については、ICT端末を使うことばかりを目的とするのではなく、使ってどのような力を身に付けさせていくのが重要である。そのため、ICT端末活用の目的と手段についてさらに整理することは、今後の課題である。		
中期取組 目標 振り返り	全校揃っての活動に制限がかかる状況が継続した1年間であったが、中期取組目標の最終年としての意識を持ち、全教職員で工夫を凝らして学校運営に邁進した。コロナ禍でも実施できる活動方法を検討し、今年度配当された端末や視聴覚機材を活用することで生徒の主体的な活動場を推進することができた。保護者にも多くの協力と理解をいただき、GIGAスクール元年として新たな教育活動を展開することができた。新学習指導要領完全実施の年であったが、評価法等の研究・研修が十分ではなかったため、今年度の実態を分析した上で次年度の最重要課題として取り組んでいく予定である。		